



ちひろとローランサン

●2009年7月15日(水)～9月6日(日)

協力：マリー・ローランサン美術館

本展では、約40点のいわさきちひろの絵とともにマリー・ローランサンの油彩画13点と版画や挿絵本をご紹介します。新収蔵作品「ブリジット・スールデルの肖像」(図1)も初公開いたします。

ローランサンが描く女性像は、日本人の感性に響き、広く愛されています。ローランサン没後、ドイツでの回顧展を除き、本国フランスでも、しばらくの間、大きな展覧会は開かれませんでした。ところが、日本では1969、71年にその画業を紹介する展覧会が開かれています。

ちひろーローランサンの絵との出会い

1969年の展覧会には、ちひろも足を運んでいます。翌年、ローランサンの絵に寄せて、次の文章を書いています。

「もいろいろをいつごろから好きだったかおぼえていない。私のもっていたクレヨンも、みんなもいろいろが一ばんちいさくなっていた。もいろいろの次は藤いろ、そして淡いみずいろ。少女雑誌の口絵なんかで、はじめてローランサンの絵を見たときは、本当におどろいた。どうしてこの人は私の好きな色ばかりでこんなにやさしい絵を描くのだろうか。」

ちひろがローランサンの絵を初めて知ったのは、女学生の頃でした。1933(昭和8)年、14歳のときに、ちひろは岡田三郎助に師事し油絵の勉強を始め、1936(昭和11)年には、朱葉会女子洋画展に入選を果たします。この同じ年に、日本でローランサンの詩画集^{*1}が刊行されています。画家を夢見ていたちひろは、恐らくこの本を手に取り、女性画家として活躍するローランサンに強い憧れを抱いたことなのでしょう。軍靴の足音が響く時勢のなかで、ローランサンの描く夢のような絵はちひろにとって深い慰めでした。

ちひろは、両親の反対を受け、一度は画家になる夢を断念します。しかし、疎開先の長野県で敗戦を迎え、自分自身の生き方を問いただすなか、再び絵画への情熱と画家への夢が焰のごとく沸き上がります。そのとき、ちひろの胸に去来したのは、モネやルオー、ボナールといった画家の絵とともに、戦災で消失した東京の自宅に掛けてあった複製画、飽かず眺めていたローランサンの絵でした。^{*2}

ちひろの色彩

戦後、子ども向けの絵雑誌や絵本に活躍の場を見出したちひろは、子どもたちを描くことを通して自らの表現を模索していきます。時として、ちひろの絵は画家仲間から甘いと批判されることもあり

ました。ちひろ自身、もっと「ドロ臭さ」がなければリアルな表現は得られないのではないのかと悩んだ時期もありました。

探究を重ねた末、迷いを捨て、「私には、どんなにどろだらけの子どもでも、ボロをまとっている子どもでも、夢をもった美しい子どもに、みえてしまうのです。」と語り、本当に自分が描きたい絵に取り組み始めます。次第にちひろの絵には、透明な色彩が解き放たれていきました(図2・3)。「もいろいろや藤いろや淡いみずいろ」だけではなく、暗褐色まで使い、水彩のにじみやぼかしを生かして、情感を細やかに表現しています(図4)。

ローランサンの色彩

一方、ちひろが愛したローランサンの絵の、その柔らかな色彩はどのように生まれたのでしょうか。

マリー・ローランサンは、リセ^{*3}を卒業した1904年、21歳のとき、パリの画塾で絵を学びます。そこで出会ったジョルジュ・ブラックを通して、フォーヴィスム^{*4}やキュビスム^{*5}など新興の芸術運動を知ります。そして、前衛芸術家が集うモンマルトルのアトリエ兼住居、「洗濯船」にも通うようになります。恋人となる詩人のギヨーム・アポリネールをローランサンに紹介したのは、洗濯船の住人パブロ・ピカソ(図5)でした。

1910年代のローランサンの作品は、灰白色を基調とした抑えた色調のなかで、淡いピンクや青が使われています。「ピアニスト」(図6)では、何本もの線で分断されたドレスの多面的な描き方にキュビスムの影響が見られます。けれど、それは柔らかな色彩と抒情的なイメージにより、独自のスタイルに消化されています。この絵には、母と二人で暮らすアパルトマンでピアノを弾いていた画家の少女時代が重ね合わされているのでしょうか。

ローランサンは、互いの芸術に大きな影響を与えたアポリネールと別れ、1914年にパリに遊学していたドイツ人の男爵と結婚します。新婚旅行中に第一次世界大戦が勃発し、フランスの敵国人となった二人は、中立国スペインへ亡命します。本格的に画家として活動を始めた矢先、生まれ育ったパリを離れ、7年にも及ぶ亡命生活を余儀なくされます。夫は次第にアルコール依存症に蝕まれ、ローランサンは深い孤独に陥ります。この時期、ローランサンは自画像を多く描きました。それらは沈んだ色調に転じ、顔には影が差し、暗鬱な内面を映し出してい

ます。また、格子状の模様が画面に配されていることも多く、囚われの身にある画家自身を暗示しています(図7)。

1921年、ローランサンは破綻した結婚生活に区切りをつけ、亡命先から単身でパリに戻ります。旧友に迎えられ、再び意欲的に制作に取り組みました。彼女が描く官能を湛えた女性や夢見るような少女は、たちまち評判となり、一躍人気画家となります。同時代のあらゆる流派から離れ、薄絹で覆われたような淡い色調の肖像を描くことで、ローランサンは独自の境地を切り開いたのです(図1)。

1929年に世界大恐慌が起り、続いて戦争への不安が広がっていくなか、世相とは反対に、ローランサンの絵はいっそう明るい色で彩られ、画家のスタイルは確立されます。人物の輪郭はより柔らかになり、これまで避けてきた赤や黄色も使うようになりました。晩年に至り、構図は簡略化され、色彩はさらに華やかさを増します。繰り返し甘美な女性像を描く彼女に対して、冷淡な評価がされることもありましたが、しかし、ローランサンの色彩への探究に鋭い洞察を向けていた人もいました。1951年、色彩の画家として名声を得ていたアンリ・マティスは、パリの大画商に「マリー・ローランサン、彼女は貴婦人ですよ！」と敬意を込めて語ったと伝えられています。^{*6}

二人の画家のなかにいる少女

ちひろが描いた少女と、ローランサンが描いた女性たち、そこに響きあい、私たちに惹きつけるものは何でしょうか。

ちひろは絵本『あかちゃんのくるひ』で、生まれたばかりの弟を家に迎える日の少女の心を、短い言葉と水彩画で表現しました(図8・9)。そこには、三人姉妹の長女として育った幼い日のちひろが重ね合わされています。あらゆる迷いや悔いを捨て去った後、ちひろは独自の水彩技法で「可愛いものがほんとうに好き」という気持ちを臆せず表現しています。

ローランサンは、20世紀前半の芸術潮流の渦中を生き抜いた画家です。時にそれらの影響を受けながら、一貫して女性を描き続けました。「男性の天才が私を威圧するとしても、私は女性的なものの一切に対しては、完全にくつろいだ気持ちでいられるのです。」^{*7}と語る通り、その絵には画家の生来の気質、少女のような心が表れています。晩年に到達した鮮やかな色彩で捉えたのは、少女時代に夢見た寵姫たちの世界でした(図10)。(原島恵)

^{*1} 堀口大樹編『マリー・ローランサン詩集』昭森社 1936年
^{*2} 戦後間もない頃にちひろが書いた日記「草穂」のなかに記述されている。
^{*3} 日本の中学校・高校にあたる。
^{*4} 野獸派。20世紀初頭に生まれた絵画運動。原色の色彩と奔放な筆触が特徴。

^{*5} 立体派。1907年頃に生まれた芸術運動。従来の遠近法を否定し、対象の形を単純化した後、細かく面に分割して描く手法を創り出した。
^{*6} タニエル・マルシェツォー著 阿部良雄訳『マリー・ローランサン』求龍堂 1980年
^{*7} マリー・ローランサン著 大島辰雄訳『夜の手帳』六興出版 1977年



図2 黄色い背景のなかにすわる少女 1969年



図3 海を見つめる少女 1973年



図4 バラ飾りの帽子の少女 1971年



図8 くまのぬいぐるみに手をのばす少女『あかちゃんのくるひ』至光社 1969年

「なにか あげたいな
おとこのこ だから
おにぎょうじゃなくて
ええと ええと」

『あかちゃんのくるひ』より



図9 『あかちゃんのくるひ』表紙 至光社 1969年

マリー・ローランサン



図1 ブリジット・スールデルの肖像 1923年

「本当にローランサンらしい作品です。若い頃からローランに夢中だった私にとって、初めて見る珍しい絵です。ちひろさんにも見せてあげたかった。」

ちひろ美術館・東京館長 黒柳徹子



図5 パブロ・ピカソ 1908年



図6 ピアニスト 1912年



図7 犬をつれた若い女 1921年
この絵は、ローランサンがパリへ戻る直前に描かれています。



図10 モンテスパンとラヴァリエール 1952年頃
ルイ14世の寵愛を受けたルイズ・ド・ラヴァリエール(右)とモンテスパン侯爵夫人(左)が主題。侍女であったラヴァリエールは慎ましい女性として、モンテスパンは冷酷な女性として知られています。

5月23日(土)『ちひろの昭和』出版記念トーク「息子が語る思い出の日々」

松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)×竹迫祐子(『ちひろの昭和』編著者・安曇野ちひろ美術館副館長) (構成:川口恵子)

○叱られた記憶がほとんどなかった

竹迫:ちひろさんのひとり息子である、松本猛さんにまず伺いたいのは、『僕は一度も叱られたことがない。』とおっしゃっていること。母親の立場から言うと、叱らずに子どもを育てるとするのは決して簡単なことではないと思うのですが。

猛:怒鳴られたこともないし、叩かれたこともない。これは間違いないですね。でも、叱られなかったかという、どうなのかな。たとえば、僕は動物が好きだったので、ガマガエルを抱いてアトリエに入ってきたりするわけです。そうすると母親が、「猛ちゃん。きっとこのカエルは、おうちのなかにいるよりも、お外にいたほうが幸せなんじゃない?」とか言うんですよ。叱るのではなくてそういう感じで説得されていたような気がします。

○母が与えてくれた愛情が原点だった

竹迫:そんな猛さんも、思春期にはお母

さんとあまり口をきかない時期があって、高校生になると、中学時代の家庭教師の先生がまた来るようになったとか。

猛:ええ。僕はその頃、たばこを吸ったりお酒を飲んだり、いろいろ悪いことをしていたんですね。その家庭教師の先生は、遊ぶのが大好きな人で、ふたりでいろいろな話をして、勉強なんて最後のほうでチョコチョコとやるだけでした。母が亡くなった後、その先生が美術館に訪ねてきたことがあって、「オレはお前のおふくろさんのスパイだったんだよ」と言われて。僕がその先生を気に入っているのを母は知っていたので、「あの子が危なくなったときには教えてください、まだ大丈夫だと思ったらそのまま話を聞いてください」と言って、彼は定期的に母に僕の悪行を報告していたわけです。

竹迫:ちひろさんからは何も言われなかったのですか。

猛:1回だけ言われたことがあります。

「子どもだけはつくないほうがいいわよ」って。「お父さんになるということがどれだけ大変なことなのか、認識しなさいよ」と。あれはさすがに効いたな。

竹迫:完全な放任ではなく、見守りながら大事どころをつかんで、子どもの成長に手を出さない、口を出さないというのは、簡単なことではないと思います。

猛:多分、ものすごく愛情を受けて僕は育ったんですね。子どものときもそう思っていたし、『戦火のなかの子どもたち』を一緒につくっていた大学生のときも、一人の人間として対等に見てくれたような気がしました。そういう人間の関係というものがあつたから、母が死んだときに僕は美術館をつくらうと思ったのだと思います。そのエネルギーや思いの強さは、やっぱり母が与えてくれた愛情が原点だったのかなというふうに思いますね。

5月28日『いのちのバトン』出版記念 日野原重明 講演会

昨年11月に出版された『いのちのバトン』。出版を記念して、トークとサイン会を開催、115名の参加者を迎え、なごやかで活気ある会になりました。日野原先生は東京館へは初めて来館、講演前には熱心にメモをとりながら「ちひろの昭和」展をご覧になっていました。

講演内容の一部をご紹介します。

○ちひろとの出会い

「私は1911年生まれ。ちひろさんはその7年後に生まれていますから、ひょっとしたら、どこかで出会って仲良しになっていたかもしれません。安曇野の美術館で絵を見たとき、インスピレーションを感じ、頭のなかに詩が自然にわきおこるように思いました。デュエットをしているような気持ちで、14、5枚のちひろさんの絵をカバンに入れて講演旅行の帰りの新幹線で、即興的に詩を書き下ろしました。ごく自然にこの詩が生まれたという

ことが、私も非常にうれしいのです。」

○ちひろの絵

「ちひろさんの絵は動いている。リズムとテンポとハーモニーという音楽の3要素がさっと描いた絵のなかにあつて、表情を持っている。それが感性に訴えてきて、詩心をうみだすという不思議な力を持っています。ちひろさんの描く目は、あまりいろいろな格好の目はなく、同じような四角な目。それなのに、足先の表情や、ひざの表情などのポーズで大きく感じが変わってきます。何回見てもあきないあの目こそ、彼女の一番のエッセンスではないか、と思います。」

○平和の願いを子どもたちへ

「私は平和がいかに大切かということ戦争体験のない子どもたちに知らせる活動をしています。ちひろさんの絵を見たり、それに添えた私の詩の朗読を聴いたりすることで、そこからわき出る“気”

のようなもの

を私たちは心で感じとることが出来ます。そうして得た一体感が、本当に大切な命を傷つけるなどんでもないことだ、という気持ちにさせる。上手に若い人に平和の気持ちを伝えることができると思います。」

参加者からは、「ユーモアをまじえてのお話、とても楽しかった」「寿命は長さではなく重さ、というのが心にしみました」「感性のふれあい、コラボレーションで大きな喜びがつけられる。ちひろさんの絵、日野原先生の言葉、もう一度かみしめたいと思いました」といった声が寄せられました。(阿部恵)



6月6日(土) 出前うたごえ喫茶「ちひろの昭和」を歌う 清水正美コンサートと歌声inちひろ美術館・東京

昭和30~40年代に人気を博した「歌声喫茶」。展示にあわせ、東京館では初の出前公演(コンサートと合唱の二部構成)を開催しました。ちひろが好きだったロシア民謡や「さとうきび畑」(寺島尚彦作詞作曲)、懐かしい「かなりや」(西条八十作詞・成田為三作曲)、「一本の鉛筆」(松山善三作詞、佐藤勝作曲)など全23曲が、ちひろの人生にまつわるエピソードや平

和への願い、展示作品のテーマなどとともに紹介されました。「ドレミの歌」では、体を動かしたり両隣の人と手をつないだりする簡単な振り付け指導があり、初対面同士もうちとけた雰囲気。「詩、絵、歌、それぞれに共通する心の暖かさを感じました」「久々に全身で声を出し、体中が熱くなりました」とのうれしい感想も。65名の笑顔と歌声が会場いっぱい

に広がる夕べとなりました。(中平洋子)



右より:猪俣ゆりさん(ソプラノ)、清水正美さん(ソプラノ)、吉田正勝さん(バリトン)、三ツ木摩理さん(ヴァイオリン)、手前:新井ちひろさん(ピアノ)

ひとこと ふたこと みこと



4月11日(土)
初めて来ました。絵に、愛を感じます。がーん、として、じーん、として、ほわーっとして……。その人が、すでにこの世にはいなくて、お会いすることができないのに、愛を感じることができる。芸術って、すごい力があるんですね。また来ます。(斎)

5月3日(日)
絵を見て、人それぞれの受けとめ方は違うと思いますが、皆それぞれ、あたたかさを感じ、ふだん何気なく忘れてしまっているものをよみがえらせてくれるんですね。この「ひとことふたことみこと」の過去のものも読みました。25年前の、今日来た人と同じ気持ちになりました。時を越えても同じ気持ちにさせるちひろさんの絵

って、とてもすてきだなと思いました。(Yas)

5月16日(土)
かわいい子どもの目、あたたかい母の目。戦争におびえる子どもの目。さびしがる目。すべての表情に、心を打たれました。そして、何だか元気になり、私も母になりたいと思いました。また来ます。ありがとうございます。(匿名)

6月2日(火)
いわさきちひろさんの好きな母の影響で、子どもの頃からちひろさんの絵の入った本に囲まれて育ちました。この美術館は約30年前、父と母がデートをした場所だそうです。今は札幌に住んでいて、なかなかこの地を訪れることができない両親ですが、今日のことを二人に話して、昔の思い出話でも聞

こうかな。(ミオ)

<ちひろの昭和展 感想ノート>
5月24日(日)
こんなかわいいよう服きてたんだ!ステキだね。(小4 長谷川慧)
5月31日(日)
「昭和」という字を見ること自体、久しぶりのような気がする。もう昭和が終わって20年以上も経つとは……。昭和から平成へ、そして20世紀から21世紀へ、僕たちはすごい歴史の変換期を生きていると思う。もちろん、ちひろさんの作品と心も時代を越えて生きているのでしょう。時代や月日を感じさせないところがすごいとも思いません。まるで今日描かれたばかりのような絵を見ると、それが古いもので、半世紀も前のものとは思えない。(森島)

美術館 日記



4月26日(日) ☀
来館者が増えるGWに備え、中庭にもカフェのテーブルと椅子を出す。連休中は、幸い天候に恵まれ、さわやかな風がそよぐガーデン・カフェで、ゆったりとくつろぐお客様の姿が連日絶えなかった。

4月30日(木) ☀
道に迷った女性を、近所の小学生が「ちひろ美術館ならいつも行ってるから」と案内して来てくれた。子どもたちについても気軽に足を運んでほしい、との願いから「高校生以下無料」にして早4年。地元への浸透を実感できてうれしい。

5月15日(金) ☀
すぐれた絵本をたくさん出版してきたポーホーム・プレス社(スイス)の創設者、オタカールさんのコレクション108点を購入。東欧諸国を中心とする絵本原画コレクショ

ンがさらに充実することに。急遽、7月11日から開催の損保ジャパン東郷青児美術館での展覧会や、編集集中の『ちひろBOX 2』にも組み込むことが決まり、学芸チームはフル稼働。

5月16日(日) ☀
朝刊を開くと、切り絵画家の滝平次郎先生の訃報が。ちひろとは「ぐるーぶ車」の画家仲間で、「滝さん」と呼び、最も信頼した画家のひとり。設立当初は当財団の役員も引き受けて下さっていた。享年88歳。心からご冥福をお祈りします。

5月21日(木) ☀
文化庁より新型インフルエンザ国内感染にまつわる注意事項のメールが届く。全スタッフに、出勤後の手洗いとうがい、体調管理等、感染予防対策を改めて徹底。マスクと手指消毒アルコールは近隣の

薬局ですでに在庫薄だ。秋以降の本格的流行に備え、対策を検討中。

5月30日(土) ☁
「わらべうたあそび」開催。大人と子ども合わせて40名が参加。予想以上に乳幼児の反応がよい。子どもの発達をとらえ、やさしく促しながら、音とことばの感性を育む、わらべうたの魅力を再発見。



*講師の服部雅子先生と。

6月15日(月) ☁
夏本番前にケヤキ等の樹木を剪定。照り返しが強いカフェテラスには、ツルハナナスの「緑のカーテン」を。ぐんぐん蔓を伸ばし、白と紫の可愛い花をつけ始めた。

窓

ちひろを思う

松本由理子(ちひろ美術館・東京 副館長)

ちひろが逝って35年目の夏が巡ってきた。あらためて医師団からの病状経過報告書を読み返し、闘病中のちひろを思う。

上腹部が重いと訴えて内科外来初診を受けたのは1972年の2月15日、大きな十二指腸潰瘍発見、外来治療開始と記されている。70年に脳血栓で倒れた実母を引き取り、住み込みの手伝いの人を複数にして対応していたとはいえ、夫と姑、大学受験中の息子も同居するなかで、自らの絵を発展させながら、家族と家計を支えて仕事をし続けるのは並大抵のことではなかっただろう。

そんな体調のなか、ちひろは5月のぐる

ーぶ車展に、ベトナム戦争下の子どもを描いた作品3点を出品する。『戦火のなかの子どもたち』制作のきっかけとなった作品だ。

童心社の元編集長稲庭桂子は、「岩崎さんはいつもあり余るほど仕事があって、ご自分から描くということとはわりと少なく」と語っている。稀有なことだったのだろう。残された自分の時間を考えたのかも。夏、体調を崩し、入院している。

1972年は、ちひろの人生を振り返ってみても、最も充実した作品を描き出し、今なお、私たちの心に深い感動を与える言葉をいくつも紡ぎ出した年だ。

病状悪化で翌73年3月下旬再入院し、6月に退院して、『戦火のなかの子どもたち』制作に取り組む。最終的に入稿し終わったのは7月19日だった。だが、10月には肝臓が肥大し癌が発見される。翌74年3月に再々入院し8月8日午後1時50分、帰らぬ人となる。4月頃、「もし、あたしが、このまま絵が描けないとしたら」「あたしの絵は、あれだけっていうことになっちゃうでしょう。それが残念なの」と言っていたちひろ。心臓の止まる直前に、「まだ死ねない」と言ったちひろの無念さが、ちひろの年齢を越した今、悲しみとともに胸に迫る。

●次回展示予定 9月9日(水)～11月15日(日)

出版記念展
ちひろ いのちの画集

ちひろは、生涯を通じ、子どもの幸せと平和を願って描き続けました。『ちひろ いのちの画集』(講談社)の出版を記念し、生命の輝きに満ちたあかちゃんや子どもを描いた作品、絵本『戦火のなかの子どもたち』の原画などを展示します。



お母さんと湯あがりのあかちゃん 1971年

<企画展> ちひろ美術館コレクション展
ねこねこ大集合

ヨーロッパやアメリカ、アジア、アフリカなど、世界各国の絵本画家が描き出す、約50点のねこたちの絵が大集合! ねこを愛する方たち必見の展覧会です。



エリック・カール (アメリカ)
『ぼくのねこみなあった?』のイメージ 1972年

東京館イベント予定

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。
ちひろ美術館のHPからもお申込みできます。 <http://www.chihiro.jp>
TEL.03-3995-0612 FAX 03-3995-0680 E-mail chihiro@gol.com

<7月のイベント>

●7月19日(日) 14:00～15:00

スライド・トーク「マリー・ローランサンの絵と人生」

マリー・ローランサン美術館学芸員の富安玲子氏をお迎えし、マリー・ローランサンの生きた時代とその絵の魅力について、スライドを交えながらお話しします。

講師：富安玲子(マリー・ローランサン美術館学芸員)

- 場 所：多目的展示ホール
- 参加費：500円(入館料別)
- 申込み：要申込み 申込み受付中



マリー・ローランサン
(1883-1956)

●7月29日(水) 14:00～
松本猛ギャラリートーク

母・ちひろの思い出や、ちひろのローランサンに対する思いなど、さまざまなエピソードを交えながら、松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)が展示をご紹介します。

- 場 所：展示室
- 申込み：不要。参加自由。

●9月26日(土) 15:30～17:30

朝日カルチャーセンター 「いわさきちひろの水彩技法」講座

朝日カルチャーセンターにて、「いわさきちひろの水彩技法」講座が開講されます。実際に水彩絵の具を用いて、にじみを生かした描法や白抜き、濁筆法など、ちひろの水彩技法を体験できます。(講師：当館学芸員)

- 場 所：新宿住友ビル4F
- ※お問合わせは、朝日カルチャーセンターまで TEL.03-3344-1946

●新刊案内

『ちひろBOX2 世界の絵本画家たち』

ちひろ美術館が所蔵する世界の絵本原画コレクションのなかから、選りすぐりの26カ国98人の作品を収録した、絵本原画の宝箱のような1冊です。好評発売中の前作『ちひろBOX』とあわせてお楽しみください。

ちひろ美術館／編
発売日／2009年7月11日
定価：1890円(税込)／発行：講談社



<8月のイベント>

●8月8日(土) 15:30～16:30

ちひろ没後35年記念 松本由理子講演会
「ちひろが教えてくれたこと」

ちひろの命日8月8日に、生前のちひろを知る松本由理子(ちひろ美術館・東京副館長)が、ちひろの人生や、平和や子どもたちへの想いについてスライドを交えてお話しします。講演終了後、参加者の方々と歓談の場を設けます(希望者のみ)。みなさんそれぞれのなかにある“ちひろが教えてくれたこと”について、語り合いませんか?

- 場 所：多目的展示ホール
- 参加費：無料(入館料のみ)
- 申込み：要申込み 申込み受付中



松本由理子

●夏!こどもワークショップ

小学生を対象に、さまざまな造形ワークショップを開催します。

8月15日(土) 14:00～17:00 「たのしいまちづくり」

- 講師：オガサワラマサコ(造形作家)
- 対象：小学生
- 定員24名 ○要申込み ○参加費500円 申込み受付中

8月22日(土) 13:00～17:00 「再生紙でつくるモビール」

- 講師：森友見子(造形作家)
- 対象：親子
- 定員30名
- 要申込み ○参加費ひとり500円 申込み受付中

8月29日(土) 14:00～17:00 「アルミのキューブづくり」

- 講師：森弥弥(彫刻家)
- 対象：小学3年生～6年生
- 定員25名 ○要申込み ○参加費500円 申込み受付中

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00より展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話しします。7月29日(水)は松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)がお話しします(参加自由)。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00より展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどをおこないます(参加自由)。*授乳室もご利用になります。

●夏季開館延長のお知らせ

8月10日(月)から8月20日(木)まで無休。期間中、18:00まで開館を延長します。

CONTENTS

<展示紹介> ちひろとローランサン……②③ <活動報告> 『ちひろの昭和』出版記念トーク「息子が語る思い出の日々」
／『いのちのバトン』出版記念 日野原重明 講演会／出前うたごえ喫茶「ちひろの昭和」を歌う 清水正美コンサート
と歌声inちひろ美術館・東京……④ ひとことふたことみこと／美術館日記／窓……⑤

美術館だより No.164 発行2009年7月10日